

コラージュ・ボックス法に表現された“数の象徴” とその変容

著者	中原 睦美
雑誌名	九州地区国立大学教育系・文系研究論文集
巻	3
号	2
発行年	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030018

コラージュ・ボックス法に表現された“数の象徴”とその変容

中原睦美（鹿児島大学）

要約：本研究は、筆者がスクールカウンセラーとして関わるなかでコラージュ療法の技法の一つであるコラージュ・ボックス法を導入した不登校を呈する中学校3年生の男子生徒との全25回の心理面接過程である。不登校の背景には生育過程における自我や愛着形成の問題が見られた。それに加え、てんかんの影響も不登校の要因として推察された。心理面接では毎回コラージュ制作がなされ、それを通して創造性が賦活し、葛藤表現や内的自己との対話がなされ、これらが自我の再形成や適応につながったと考えられた。とくに、Jungが提唱する「数の象徴」における“二”の象徴が繰り返し表現され、葛藤や緊張の表現からそれらの統合に移り変わるという質的変容が認められた。また、はみ出しや空白、重ね貼りの混在や、時空間が飛躍するなどの特徴にも質的変容が認められた。これらは、面接場面の变化や日常場面の改善と合致していた。面接関係の保護という観点からも、学校臨床におけるコラージュ・ボックス法の有用性が確認された。

キー・ワード： 数の象徴，“二”の表れ，コラージュ・ボックス法

I 問題と目的

心理療法にはさまざまな技法があり、表現療法(山中, 2002)と呼ばれる箱庭療法や風景構成法、描画法など従来から積極的に導入されている。近年、箱庭療法から発展したとされるコラージュ療法も広い領域で導入されるようになってきている。コラージュ療法は1987年より森谷が導入している心理臨床技法の一つで、わが国独自の心理療法の技法とされる(森谷, 2012)。筆者は、学校臨床や外科など一般病院の臨床場面にてコラージュ・ボックス法(以下、ボックス法)を導入し、その適用性に関心を抱いてきている。

ところで、表現療法のなかでは、表現された内容に加え、単一なものに孤独や孤高、二つのものにペア関係や対立関係、上下関係などが解釈されたり、三つのものに家族関係や小集団との関係、三者関係、群衆に集団との関係が・・・などと解釈されたりするようにクライアント(以下、CI)の抱える内的世界や課題が数量的なものに現れることが珍しくない。Jung(1938/1989)は、“数字が心と物質を統制する”という仮説を立て、“一つは二つになり、二つは三つになり、第三のものから第四のものとしての一者が生じる”とし、それぞれの数の意味を詳細に述べ、数そのものに着眼した“数の象徴”を論じている。Jungの数の象徴については、河合(1977)や目幸(1984)などによって論じられているが、事例研究においては、中原(2010,2011)がボックス法導入事例の考察で触れる程度で、その意味内容を積極的に論じたものは寡少である。

今回、ボックス法において繰り返し“二”の表現が出現し、象徴的意味が典型的に表われていたと考えられた不登校を呈する中学3年の男子生徒の事例を学校臨床場面にお

いて経験した。面接過程を振り返るなかで、今回は、コラージュに表現された“二”の表れ方やそれが意味するもの、“二”の変容と臨床像の変化に着目して検討を加え、数の象徴に視点をあてる意義についても考察する。

II 事例

1. 事例の概要

事例は本筋に影響がない程度に加筆修正してある。

事例 A：中学 3 年男子生徒 **来談経路：**不登校及び「友人を殴って側溝に落とした」ことから、心配した担任の判断で、当該校に派遣された男女のスクールカウンセラーのなかで「女性の方がいい」と筆者（以下、SC）に面接を依頼される。

主訴：勉強ができない。

印象：中肉中背で、暴力をふるった情報とはかけ離れた、穏やかで大人しい印象。

家族構成：本人、両親及び複数のきょうだい。面接当初は、生育歴は不明。

担任情報：テスト欠席が多く勉強についていけない。責任転嫁傾向があり、似たような‘類友’はいる。中学 1 年時「不良に絡まれた」という狂言があった。家庭内暴力(母親に物を投げる)がある。担任は、A 君の性格面や家族関係をよく把握し、関わりも熱心で、臨床心理士の守秘義務を理解した上で情報交換にもほどよく積極的であった。

特記事項：郡部にある中規模中学校で、不登校が多いという問題を抱えていた。

インテーク面接：はにかんだ様子で入室し「勉強ができない。相談してくれるかなあ」と、独特な言い回しをする。「行かなきゃいけないけど、行きたくない時がある」「5 年生から休みがちで、勉強がわからない」と言い「自分がさぼっているからダメなんだなあ」と語るが、現実感は希薄で、その後も口癖のように毎回口にする「がんばらんとなあ」を繰り返す。てんかんについては、詳細不明だが、小学 5 年から自覚症状があるが服薬管理が不十分なため、服薬の意味を説明する。面接でのおとなしい印象と「暴力」というエピソードにギャップを感じ、複雑な内界を抱えている可能性や、漠然とした語りや中学生という思春期の年代からは表現療法の方が、内的葛藤をより安全に、また、象徴的に表現できると考えられた。さらに、初めて SC を受け入れる当該校の設備状況を鑑み、表現療法のなかでもコラージュ療法が適用するのではないかと考えた。毎週 1 回の面接契約をし、A 君にコラージュ療法を提案すると、はにかみながらも興味を示す。

見立てと方針：不登校状の背景には、自我形成や母親との愛着形成の積み残しがあり、さらに学習の遅れが不適応感を増幅していると推察された。自己感覚や自己統制の不安定さには、前述に加え、てんかん発作の影響も推測された。表現療法の適応が見立てられ、受験期であることも考慮し、まずは現実適応や内的成長を支援していくこととした。

面接室等の状況：当該校には SC 専用の部屋や備品がなかった。表現療法の適用性が高いとされる中学生という年齢層を考慮し、描画やボックス法などの用具は SC が個人で準備し、表現療法に対応できるようにした。

面接形態：全 25 回（インテーク面接＋心理面接 24 回）、毎週 50 分の個別面接。会議室の長机を挟んで着席し、対面にて心理面接及びボックス法を実施した。毎回、コラージュを制作し、その後、短時間ながらも日常生活を中心とした対話を行う流れであった。

2. 心理面接過程

心理面接 24 回を 3 期に分け、コラージュ制作を中心にその過程を記す。『』はタイトルを、「」は A 君、<>は SC の発言を示す。代表的な 6 枚を図示し解釈を加える。**コラージュの手続き**：八つ切り画用紙、はさみ、スティック糊を準備した。パーツ（切り抜き）は事前に森谷(2012)が提示している自然、人物、動物、植物、食物、乗り物、その他からなる基本のパーツを合計 20～30 枚程度準備した。おおよそのサイズは、大が台紙の 1/4～2/5 程度、中は 1/4 程度で、小はそれ以下であるが、カッティングを重視し極小のものは避けた。ボックスには多彩な大きさのパーツを入れた。さらに A 君にとくに必要と思われるパーツ 1～2 枚を加え、予備パーツも手持ち用に準備した。コラージュ制作中、A 君は、いずれの回も、パーツの選択や配置、カッティング、貼付、タイトルつけという一連の制作過程において、高い集中と丁寧な取り組みが展開された。

第 I 期：第 1 回～6 回 “二” の象徴の出現

第 1 回(X/6/2)では、コラージュ①を制作(図 1)。改めて自己紹介し、ボックス法を提案する。暴力や衝動性を検討する意味から、獐猛な動物や雷、他方で穏やかな内面や不安感を想定し、静かな風景やリス、気球などを基本パーツに加えた。A 君はすぐに興味を示し、ハサミは使用せず大きめのパーツを用いる。視点や内容は異なるが上下とも森の風景が貼られ、全体的に静謐な印象がある。左下には鬱蒼と苔むした深い森が配置され、右側は薄日が差す森が配置され、二つを繋ぐように自己像を連想させるリスが登場する。“森が二枚”貼られるがともに下部にはみ出し、内的課題の重さが窺われる。上部には“二枚とも海にちなむパーツ”が選ばれ、左上は島と海浜の風景が配置され孤独や穏やかさが伝わる。右上は港で、この二つは小さい気球の重ね貼りで繋がれている。上下の相違や、前景と奥行きからは視点の幅広さと同時に視点の定まりにくさも連想される。気球は不安感だけでなく何かはゆっくり展開されていく予感もある。重ね貼りされた小さなリスの姿や森の視界が開けると船が寄港する景色からは、未来への可能性を感じさせ、コラージュの適用性や心理面接を引き受けていけそうな感触を持つ。第 2 回(6/9)は、コラージュ②『自然は大切にしよう！』を制作し「自分の世界」と語る。上部や右側は空白だが、大きめの穏やかな水辺が左手下方に配置され、自己像を連想させる馬のアップの顔や枝、小鳥などが細かく切り抜かれ重ね貼りされ充実している。群れの小さな羊から‘ようこそ’の文字メッセージが吹き出し重ね貼りされ、A 君の内界に導かれた感じがした。風船が貼られ、前回同様に不安を抱えながらもゆっくり動こうとする印象もある。てんかんについて<自分の身体なのにコントロールできない歯がゆさがあるかもしれない><今は、お薬の力を借りていきましょう>などを伝える。第 3 回(6/30)は、コラージュ③を制作。上部と右側は空白だが、左は冬山を頂く大きな風景で、手前の大き目の野原二枚の左側には生後間もない 6 匹の仔犬が、右の野原には仔猫が重ね貼りされる。右手に奥に剣しい山が貼られ、課題は厳しく険しいものとして遠ざけられた印象がある。他方、菜の花の柔らかさや小動物からは依存的で退行した印象があり、急速に SC との距離が近づいた感じを受けた。この回から、“二”で表現されるものが目立っていく。制作後、修学旅行のお土産が渡される。<ありがとう。でも SC のお金は頂いているので、今後は気を遣わないで>と伝える。

同日は、担任経由で打診していた母親単独の面接が設定された。双子の弟は出産時に

死亡し、A 君自身も仮死状態で障害の可能性を告知され厳しくしてこなかった。第一次反抗期はなく、母親は仕事が多忙で負い目があることを語り、A 君に向き合う怖さが口にされる。母親の罪悪感を受け止め、A 君の不登校状況について解説し、母親面接が可能であることを伝えた。第 4 回(7/7)はコラージュ④を制作。大きめサイズの風景主体で、右上は行く手を阻むように家の手前に沼が配置された。左中央森林には唐突に小さめの“ボール二つ”が重ね貼りされる。タイトルはなく、はみ出しを気にする。部活での女子とのトラブルが語られ、了解の上、担任に報告する。第 5 回(7/14)は、中程度のサイズのパーツでコラージュ⑤を制作。用紙に収まらない様子でくもう一枚つないでもいいですよ>と伝えると上下二枚をつなぎタイトル付けを試みる。初夏の風景が中心で、“建物が二つ”と左向きの飛行機、コラージュ③よりも成長した子犬が重ね貼りされる。「寂しかったから飛行機飛ばした」「城がもうちょっと…」とパーツについて語るようになる。第 6 回(7/28)コラージュ⑥『夏は海と花火』制作(図 2)。静かな海や動く船、衝動性ととも季節感が連想される花火、守りとしての城などを基本パーツに加えて準備した。左に大きいサイズの夏の海が貼られ、右上には中程度の城と花火が配置される。昼と夜が対応するように配置され、“遊園地が二枚”、“灯台が二枚”逆向きで貼付される。海には切り抜かれた“極小の島二つ”“極小の船二隻”と逆向きの“極小のシャチ二頭”が続け様に重ね貼りされる。丁寧さに加え執拗さすら感じさせ、それほどまでに“二枚”を貼りたいのだなと感じる。方向の定まらない孤独感や葛藤、緊張を抱えながらも動き出そうともがく様子が推察される。制作後、家の手伝いを自分だけがしている不満などが語られる。この頃から、SC が勤務する曜日を中心に少しずつ登校日が増えていく。担任から、姉ら女性家族に暴力的な面があり、部活内の女子生徒とも軋轢がみられ、女性イメージが否定的であることから、その修復を期待して女性 SC を指名した経緯が伝えられる。夏休みを迎える。



図1 コラージュ①

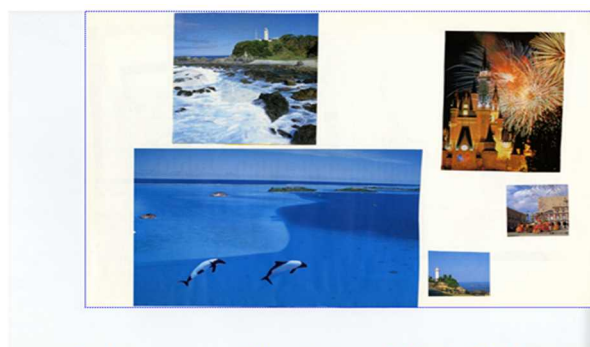


図2 コラージュ⑥ 夏は海と花火

第Ⅱ期：第 7 回～11 回 キャンセルからひきこもりへ

夏休み明けの第 7 回(9/1)はコラージュ⑦制作。中央下の砂浜に唐突に大きなヒマワリの鉢植えが重ね貼りされ「現実にはないけど」と語る。砂からは創造への思いが窺われ、古代の儀式で用いられるヒマワリからは季節感や A 君の模索の道は真摯な道であることが連想された。上部には気球と飛行機が貼られ、「空に飛ぶものが欲しい」と語る。第 8 回(9/8)コラージュ⑧『きれいな海』制作。大きな青系パーツで統一され、左側に海と熱帯魚が泳ぐ海底、右側には死海の上にコラージュ③⑦同様、唐突な感じで“二輪の桔梗”

が重ね貼りされる。SC が「コラージュ以外でお話したいことはない？」と聴くと「これ（コラージュ制作）がいい」とにこにこして答える。第 9 回(9/18 いつもと違う曜日)コラージュ⑨『ジャングルかな?』制作。初めて大きめのライオンやキリンなどが選択され、丁寧に切り抜いて貼付される。この時期まで、登校や受験などの現実課題は全く話題にされないことに、SC は焦りを覚える。それに呼応するように無断キャンセルが続き、担任は「学校祭疲れではないか」と言う。さらにキャンセルが続き、担任からの依頼もあり、SC 側のアクティングアウトといえる行為をためらいながらも電話を入れる。A 君は「しんどい」「学校祭疲れではない」と言う。再度、面接契約を確認し、<今後は私から電話は入れませんが、待っていますね>と伝える。電話後、SC は完全不登校が必要な時期かと考え受け止める覚悟と同時に、心許なさも抱いた。第 10 回(10/20)大きなパーツのみでコラージュ⑩『ふるさと』を制作。左側は公園で、俯瞰的な古民家の風景が右側に大きくはみ出し、中央には初老の男性が後ろ向きで家に向かう構成で、今にも引きこもりそうな懸念を抱く。第 11 回(10/27)コラージュ⑪『春がない』制作(図 3)。小さめの夏秋冬の“風景が二枚ずつ”貼られる。秋のパーツは二枚ともやや大きく、A 君にとって現実の秋が重く体験されていると推察された。「がんばらないと」と繰り返す口にする。<(コラージュのように)春がくるといいね>と語りかけると涙ぐむ。担任から、やる気がなくひきこもり状態であると知らされる。この後、SC の出校日のみ欠席するようになり 1 ヶ月ほど中断する。担任と話し合い、さまざまな影響を検討した上で、11 月中旬に<A 君なりに心のなかで試行錯誤しているのだろうな>という応援の思いを込め、海上を左方向に進む一隻の船を貼った八つ切り画用紙半サイズのコラージュを制作し、厳封して担任に託した。



図3 コラージュ⑪ 春がない



図4 コラージュ⑰

第Ⅲ期：第 12 回～23 回 “二” の象徴の変容

第 12 回(12/8) 久しぶりに来談し、大きめのパーツでコラージュ⑫『メリークリスマス』制作。“二枚の城の雪像”とケーキが上半分に堂々と貼られる。SC が渡したコラージュは「嬉しかった。丁度いい額があって飾った」と微笑む。A 君の未来を拘束しないよう<嬉しいな。でも、必要なくなったら処分していいからね>と伝える。第 13 回 (12/15) はコラージュ⑬制作。小さいパーツだが未来への動き出しやその不安が表現される。この回から「休んでいない」ことが毎回報告され、受験への意気込みが語られる。第 14

回(12/22)は、大きいパーツでコラージュ⑭『冬にぴったりな食べ物?』制作。中央にすき焼き鍋が貼られ、暖かい室内から窓外の冬の街を眺める風情である。3回続けて食べ物が貼られ、現実行動に向けたエネルギー備給の印象がある。左下には‘“ふたり”と一緒にいたいから’の文字付きのリースが貼られ、SCや内的自己などの同行者が連想された。制作後、家族や恋愛観を語る。面接関係が深まった感覚があり、担任に見てもらおうと「‘ふたり’って先生のことじゃない?」と言われ嬉しく感じるが、後日、表層的に浮かれていたと反省した。年明け以降、ほぼ毎週面接となる。受験期相応の将来展望をめぐる課題や、“二”のあり方に‘葛藤や緊張’から‘同行者やふたり’のような質的な変容を感じさせる表現が展開され、現実的な話題が増える。第15回(X+1年1/12)コラージュ⑮制作。左側の大きな温泉宿の室内とは真逆の高い冬山が中央から右側に三枚貼られ、自己像を連想させる小さな登山者が登場し、自己像を思わせる小さなイラストの狐が重ね貼りされる。これまで溜めたエネルギーをもとに課題と対峙しようとする印象がある。良好な登校状況や推薦入試での緊張などが語られる。てんかん発作が起き不安であったことも語られる。第16回(1/19)は、中程度のサイズのパーツでコラージュ⑯『車に乗って遊びにいこー!』制作。全体的に寒色のやや寂しい色合いである。冬山は少し遠ざかる配置で、右下の門扉は閉ざされている。他方、左下には大きなアウトドア車が左向きに貼られ、内面に向き合う力強さが伝わってきた。第17回(1/26)コラージュ⑰(図4)は、モノクロだが初めて同世代の少年達が右下に配置される。上部には「合格していたら(左)」「不合格なら(右)」と躍動するカラーの“女性が二枚”配置される。左側は中程度の彗星や疾走する道路で、吸い込まれそうな勢いであり、目眩を感じるほどの急激な変化が連想される。制作後は、調理系専修専門学校への期待が語られる。担任から、合格通知が来ているが「調子に乗らないようしばらく伝えない」方針が伝えられる。第18回(2/2)コラージュ⑱『心の落ち着く場所』は、大きいパーツで構成される。“二”刀流の‘宮本武蔵’が文字で表現され、専門と高校資格の双方を取得できる進路と重なった。文字メッセージ‘果てしなき道の出発地’が添えられており、出立を意識し始めたA君の内界が推察された。第19回(2/9)は、珍しく小さめのパーツのみでコラージュ⑲『夢があれば心はハッピー』を制作。合格が伝えられた直後で、左下には合格祝いを連想させる水上花火が配置され、左上の授業風景と右側の調理実習風景が少し大きな虹と気球で繋がれていた。成長不安と同時に喜びが素直に表現されていた。そ



図6 コラージュ⑳
こころの中にたくさんの花



図5 コラージュ㉑
日本料理が一番、オリンピックも、一番

の後は、卒業後の生活や家族関係を統合するような世界が表現される。第20回(2/16)コラージュ⑳『明るい家族楽しいスキー』、第21回(2/23)コラージュ㉑『山と海、そしてさくら』では、家族連れが登場し、食材が祝いの象徴として貼られ、剣山は春の山に変化し、明るい景色に向かう兆しが見られ、剣しい山は春の山に変化し、明るい景色に向かう兆しが見られた。第22回(3/2)コラージュ㉒『日本と外国』では、小さいパーツによって夜景や橋、風景などが“二枚ずつ”貼られた。宮本武蔵は銅像で表現された。第23回(3/9)は、コラージュ㉓『日本料理は一番、オリンピックも一番』を制作(図5)。卒業直前の制作となる。祝いの気持ちを込めた刺身の盛り合わせと、男女・競技内容・ゼッケンなど多様なアスリートのパーツを加えた。大きな刺身の盛り合わせが中央に貼られ、左上の小さめの食材と右側の競技を終えて万歳する小さいスキージャンパーを繋ぐ印象がある。スキージャンパーは胸にゼッケン“2”をつけている。刺身皿には箸が重ね貼りされ、食べ物は、祝いの膳となっている。男性性の獲得や高校進学への素直な喜びが表現されていると思われた。数日後、無事に卒業を迎える。SC契約期間は満了したが、まとめの作業の必要から学校と話し合い、フォローアップ面接を設定する。第24回(3/23)コラージュ㉔『心の中にたくさんの花』を制作(図6)。同世代の複数の人物や祝いの意味をこめた花、未来に向かって欲しい思いから乗り物を加えた。多彩な大きさのパーツが選ばれ、コラージュ①とは対照的な明るい色彩で、切り花や桜、花火がはみ出しながら祝うように貼られる。また、左下の家は菜の花の小道と続いており、コラージュ④では沼でさなぎられていた家の佇まいが、歩いて辿りつけるように変化している。右中央のバスは右側に進行し、自分を祝い、出立する気持ちが伝わる。制作の後半、A君のコラージュ制作を見守りながら、別途、SCも自然にピンクの花々主体のコラージュ制作に取り組む。できあがった二つのコラージュを「きれいですね」と、しばらく二人で眺め、花束交換のような感じでコラージュを交換した。面接を振り返り<いずれ要らなくなったら処分していいからね。応援しています>と伝え、終結とする。

Ⅲ 考察

1. A君の変化

A君は、コラージュ制作を通した心理面接のなかで創造性が高まり、SCを同行者とし、時に後退しながらも徐々に登校や進学などの葛藤と向き合い、家族関係を再構築し、内的自己との対話を行い、それらが自我の再形成や再適応に繋がったと考えられる。今回は、面接過程のなかでもコラージュの“二”の表現に焦点をあて検討する。

2. 数の象徴

(1) 数の象徴

先述したように、数の象徴は、Jung(1938/1989)が提唱したものである。Jungは“三から四の動きに心理学の重要な動きがある”として“四”を重視している。これはJungが提唱している『個性化』の概念—人生の前半で排除していた自分自身を見つめ取り入れることと重なるのではないだろうか。この数の象徴を解説・補完したものに von Franz (1970/英訳 1974)や河合(1977)、目幸(1984)等があり、内的世界との関連について解説がなされている(表1)。とくに von Franz は、Jung の説を解説するだけでなく深

層心理学と物理学の視点からも論を展開し、数の象徴的意味を物理学、生物学、数学の見地から発展させている。他方、実際の心理臨床場面で出会う対象は悩みや滞りを抱えている人々が多く、“四”の象徴以前と考えられる孤独感や葛藤、緊張などを意味する数の象徴が表現されやすく、面接や回復過程においてその「数」が変容する(中原2011,2012)と想定される。A君の場合も初回、小さいリスという“一”の象徴から始まるが、背景には「海が2枚」「森が2枚」と“二”が表現されており、その後、重ね貼りで“二”が繰り返し表現され、“三”の象徴への移行が見られた。これらは、登校状況の改善や受験生らしい言動、初めての家族旅行や受験への支援などに見られた家族関係の修復といった現実生活の変化と合致していた。

表1 数の象徴：“一”から“四” (Jung(1938), Franz(1970/1974), 河合(1977), 目幸(1984)を元に再編集したもの)

一	“体と心、物質と精神の根元である” “一”の世界。unus munde (ウーヌス・ムンドス)。元型、無意識の命の表現、全体性。“人はまだ単純に無批判な無意識の状態に周囲に参与し、事象に服従する”。
二	“二”の意識が生じてこそ“一”の概念も生じてくる。分割、対立を仮定するもの。緊張や葛藤と結びつきやすい。影の問題と関係が深い。繰り返しが多い。“一”と対立はしない。
三	相対する二つの間の緊張が解放される。力動的な実現化の背後にある。心のエネルギーの流れ。意識を観察する干渉的動き。時間と運命の繋がり暗示する。出来事の力動的な流れを示唆。
四	完全統一の形。四を含む球・円：神の観念を意味するあるものの部分・質・側面を象徴。無意識の心の定式である四元性。

(2) A君に見られた“二”の象徴の変容：

A君のセッションでは、数の象徴のなかでも“二”の象徴が繰り返し表現された(表2)。セッション①で「リス」という“一”と海や森の“二”から数が出現し、セッション③からは意識的に貼るかのように“二”が繰り返し表現された。

まず、“二”の出現状況を辿ってみる。前半のセッション①～⑪は、パーツの枚数によって表現された“二”が目立ち、緊張や葛藤的なものとして解釈された。現実場面でも登校や受験をめぐる内的課題に取り込まれている時期であり、「がんばらない」と口癖のような自己鼓舞的な言動とは裏腹に怠惰な言動が目立ち、A君が抱える両価性や不全感と重なった。後半になると、“二”の表現はセッション⑫では文字表現「ふたり」となり、セッション⑬～⑭では二刀流の代表「宮本武蔵」の文字や像になるなど、より象徴性の高い“二”の表現に変容した。そして、セッション⑮では先述したように、葛藤や緊張を抱えながらも未来に進もうとする統合的な“二”の表現となる。この時期はまさに、日常場面で受験生らしい言動が認められてきた時期と重なる。セッション⑯では三人連れのリアルな親子のパーツに家族関係の修復が認められた。A君の対人関係も母親との愛着形成の修復に代表される二者関係のテーマから三者関係のテーマに移行していくことが推測された。

次に、代表的な“二”の変容と考えられるコラージュ⑥(図 2)とコラージュ ⑳(図 5)を挙げて検討を加える。表 1 のように、“二”は分割、対立を仮定するものであり、葛藤と結びつきやすく、影の問題と関係が深いとされる(河合, 1977)。コラージュ⑥に表現された“二”は、向きの異なる船やシャチ、島、灯台などは葛藤や緊張、孤独の表現と考えられた。同時に、この“二”は、影や同伴者・代理自我としての SC あるいは双子の亡弟、内的自己像とも理解できる。船とシャチは切り抜かれた極小のもので、「何としても貼りたい」思いが強く伝わる。この“二”は、「変化への動き vs.ためらい」という葛藤や緊張の表れと理解された。この背景には、欠席状況の変化や、同行者でありながらも急速に近づいた面接関係から生じた退行(第 3 回)や受験に焦りを抱く SC への疑念といったものへの両価性も反映されていたのではないだろうか。一方、コラージュ㉓では、空間象徴の未来領域に両手を挙げたスキージャンパーが貼られた。胸には数字の‘2’がゼッケンに縫いつけられおり、葛藤や緊張、影の象徴である“二”を抱えながら未来に進もうとする統合性への動きであると推察され、“二”が表現する質的変容が確認された。Jung は“二”について、“一なるものと他なるものの間には対立の緊張が生じる。しかし、あらゆる対立の緊張は Ablauf (流出, 進水などの意味) に向かい、そこから第三なるもの(das Dritte)が生じる。第三なるものにおいて緊張は解消

表 2 “二”の象徴の出現状況

Collage 番号	“二”の出現状況
①	森 2 枚, 海景色 2 枚
③	犬 2 頭, 猫 2 匹, (仔犬 6 頭)
④	ボール 2 個
⑥	シャチ 2 頭, 船 2 隻 (極小かつシャチと船は逆向き)
⑧	桔梗 2 輪, 遠景に泳ぐ 2 人
⑨	ライオン夫婦 (“三”の片鱗)
⑪	夏 2 枚, 秋 2 枚, 冬 2 枚
⑭	文字/「ふたりに一緒にいたいから」
⑰	女性 (縮こまる vs. ジャンプ)
⑱	文字/宮本武蔵 (二刀流の代表)
㉑	文字/宮本武蔵 (三人連れの親子)
㉒	宮本武蔵像, 都会の夜景, 橋
㉓	ゼッケンに数字の ‘2’

し、失われていた一なるものが再び現れる・・・”と“三” (動き) への展開を示唆している。このように同じ緊張葛藤を表す“二”であってもコラージュ⑥では「緊張と葛藤を表す」ものからコラージュ㉓では「緊張と葛藤を抱える」ものへと質的変容がみられ、“三”に向かう過程であると推察された。実際、コラージュ⑨からは“三”の

片鱗が窺われていたこととも重なる。

このように同じ“二”の表現であっても、緊張や葛藤の表現から統合や“三”に向かうものまで質的変容が確認された。数の象徴という知見は、Cl.の理解や面接過程の検討に有用な観点の一つとなりうると考えられる。しかし、常に“数字”に数の象徴が明確に表れるとは言えない。数の象徴は多面性を有しており、短絡的に1対1対応であてはめることは危険でもある。面接関係全体の流れの中で、かつ表現されたものの全体の流れのなかでその表れ方に着目し、理解しようとする姿勢が肝要であろう。

3. その他のA君のカラーージュの特徴

形式面での特徴を挙げてみる。(1) 空白とはみ出しの混在：前半の空白は自己欠損感やエネルギーの低下と解釈されたが、後半はゆとりを示す空白に変容した。はみ出しは、箱庭で枠外への配置は心的内容が自我の把握を越えている、あるいは何かの存在を予感している(河合, 1994)解釈と重なる。また、空白との共存からは両価性が推察された。(2) 重ね貼りの頻出：25枚中21枚という高い頻度で見られ、内面を隠すというより表現欲求の表れと理解された。重ね貼りも空白と混在しており、自己欠損感を抱きながらも外界との繋がりを求めていたと解釈された。(3) 大きいパーツ主体での構成：背景に大きいパーツが貼られ、重ね貼りで小さいパーツが貼られる傾向が見られた。日常の転換点の次期には小さめのパーツが主体で構成され(カラーージュ⑩⑬⑳)るなど、心的エネルギーの変化や日常の変化と連動していた。(4) 時空間の飛躍：カラーージュ③④⑦⑧などで花鳥や山、砂浜、海などの上に、唐突に動物や植物が重ね貼りされた。依存や葛藤の表現と同時に、時空間をめぐる連続性の課題が推察された。森谷(1982)は、てんかん児の箱庭に関連のないものを手当たり次第に置いた事例を紹介し、時間の連続性の問題から物語性が欠如しやすいが、長期的に見ると意味のある連続性を帯びることを言及している。本事例でも回を重ねる毎に背景の風景との連続性が見られた。(5) 文字メッセージの効果的な使用：内界表現の欲求や内面の再確認、自己の意識化に繋がっていたと考えられた。(6) 季節感が一致：日常と一致しており、健康度の高さや回復の姿が窺われた。(7) 丁寧なカッティングや構成：カラーージュへの親和性の高さが一貫して認められた。数の象徴以外にもこれらが自由に表現されることにより、本来の創造性が賦活され、現実適応に繋がったと考えられた。

内容面では、使用されたパーツ自体にも意味の変容が見られた。「山」はカラーージュ③では遠景に険しい山が配置され遠ざけられていたが、現実の入試に向かい始めたカラーージュ⑮では、冬の剣しい山が眼前に貼られ、次第に中景の山に変わり、合格後のカラーージュ⑱ ㉑ ㉒では遠景で緑豊かな春の山に変容し、課題体験が変容したと考えられた。「食べ物」は、エネルギー備給するようなカラーージュ⑮～⑰から、カラーージュ⑳, ㉓では祝いの象徴に変容した。「家」は、先述したように行く手を阻まれていたカラーージュ④の表現から、菜の花畑から小道が続いており居場所を見出した印象があるカラーージュ⑳に変容した。「春」は、“春がない”と、受験期の重さが連想されたカラーージュ⑩から、春爛漫を思わせるカラーージュ㉒の表現に変容した。他にも、リアルな男性像(カラーージュ㉓)や男子生徒(カラーージュ⑰)、家族(カラーージュ㉑, ㉒)の出現など自己像や対人関係の表現にも変化が見られた。質的にも未来志向的で対人関係に開かれて

いくような内容に変容していった。

創造性について、Winnicott(1971/1979)は人間にとって普遍的なものであり、具体的な形態の有無に関わらず“生きていることに付随するもの”とし、“個人は創造的である場合にのみ自己を発見する”と述べ、述語の **playing** を提唱した。河合(1988)は、感情の発散だけでなく「感情表現」となるときに治療的になると述べている。山中(2002)は **Play** の語源を詳述した上で、プレイセラピーも含めて「表現療法」という術語を提唱している。本事例でも創造性の賦活が適応に繋がっており、コラージュ法は、表現の面からも創造性の面からも臨床的有用性が高いツールとであることが確認された。

4. Cl-Th(SC)の二者関係—陽性の逆転移の検討とパーツの準備性

今回の面接は、A君の心理支援を受け入れる姿勢や健康的な面に支えられていた。第I期のSCは細い糸を重ねるような面接関係に期待を抱いていたが、A君は転移性治癒や距離が急に近づいた感じ(第3回)を見せながらも悪性の退行には至らなかった。第II期は、受験など現実的な時間への焦りがSCにあった。A君のコラージュ作品を通して自らの焦りに気づかされ、A君の苦しさを一緒に抱える思いで<待つ>姿勢が取り戻せた。A君の内面世界の肩代わりや融合、表裏といった二者関係であったが、これが第III期のA君の適応への変化に繋がったのではないだろうか。

そして、SCには陽性逆転移が生じていた。(1)無断キャンセル時に電話を入れる / SCが制作したコラージュを渡す。(2)最終回の制作したコラージュの交換について検討する。これらは、筆者が通常の臨床場面では行わないものである。心理面接は場の設定(治療構造)があることで心象徴する場となりうる。(1)のSCの行動化はClの日常の世界に非日常が形として侵入する危険を孕み、(2)のコラージュの交換は、河合(1994)がいう終結の儀式とも言えるが、他方でClの未来の時間に侵入し拘束してしまう危うさも否定できない。これらのSCの行動化 **acting out** は、1)SC創生期独特のSC活動への不安と気負い、2)A君との関係性への甘え、3)SC契約2年目が終了することへの安堵とClへの愛惜、4)担任の気持ちに応えたい欲求、があったものと推察される。そのため、日常の感覚と心理臨床の感覚のバランスが動揺し、<迷いながらもやってしまった>感がある。面接関係上は、関係の深まりを歓迎しながらも、のめりこみや飲み込みへの危険をも感知していたが、それでも「やってしまった」と言わざるを得ない。SC自身も前半は“二”の象徴である緊張と葛藤に苦戦していたといえる。また、学校臨床は面接構造に日常が入りやすい特徴があり、コラージュの簡便性も一歩間違うと日常性の侵入を促進しかねない点も考慮する必要がある。

他方、この行動化は単なる禁止事項ではなく、行動に際して悩む姿勢が重要と考える。ボックス法においてはセラピスト(Th;今回は、SC)が事前にClの内的世界に思いを馳せ、パーツを準備する。この時点で、中村(2004,2011)が言う‘コラージュ対話’が発生しており、陽性の逆転移はつきものと言える。河合(1994)は、1971年時の箱庭の解説を再掲し、治療者自身がClに何が必要かを想定してフュギュアを集めることを推奨しており、ボックス法の準備性と重なる。しかし、準備されたパーツが全て意識化されているとは言い難い。「なんとなく必要を感じる」というThの前意識的な感覚から加えることもある。それゆえ、基本パーツがCl側の選択の幅を保証し、Th側の偏りを

緩和する機能を持つと考えられる。また、ボックス法はその準備に物理的にも精神的にも時間を要する。ボックス法の導入を見立てた自体も陽性逆転移が芽生えているとも言えよう。これらを自覚することが CI-Th 関係の展開につながり、CI の創造性や適応性の回復への寄与に繋がると期待される。河合(1991)は、箱庭療法について、自己治癒力が活性化されるためには守りが必要であり、それが治療者であり箱庭の治療構造であるとしている。そして「自由にして保護された空間」を提供し、そのなかで表現されることの重要性を述べ、“その表現はクライアントの理解を超えた創造性を持っているからこそ癒す力を有している”としている。これもボックス法が有する治療構造とも合致する。心理療法が孕む二律背反性を抱え、<このパーツが必要と考えたのはなぜか？>と自問し、陽性逆転移を自覚することが面接関係を支える構造になり得るのではないだろうか。これらの輻輳した守りが学校臨床における守りとなり、Th(SC)の守りにもなりうると思う。今回は、二者関係での面接でありながらも、学校ならではの担任が介在することで、三者関係に開かれ、家族に準じた力動をもたらし、かつそこにも陥らないように守られていたともいえるのではないだろうか。

IV 今後の課題と展望

今回、コラージュ・ボックス法において繰り返し“二”が表現された意味やその変容と日常の変化について Jung の“数の象徴”の観点から検討した。心理療法において、数の象徴にも視点をあてることの意義が確認されると同時に、数の表現には治療関係も含まれることを自覚し、その意味を検討していくことが、面接関係の進展や各々の自立性につながっていくのではないかと考えられた。今回は、数の象徴に焦点をあて論を進めたが、いずれ、心理面接全体の二者関係や SC ならではの学校との連携についても検討を加えたい。

<付記>本稿は、日本コラージュ療法学会第4回大会での事例研究発表を加筆修正したものである。指定討論の京都文教大学教授森谷寛之先生、司会の丸亀市立富熊小学校教頭徳永桂子先生、貴重なコメントを頂きましたフロアの諸先生方に感謝いたします。論文執筆にあたり的確なご指導・ご助言をいただきました高槻赤十字病院緩和ケア診療科部長岸本寛史先生、多摩心理臨床研究室代表乾吉佑先生に感謝いたします。最後に SC 制度創生期に大変お世話になりました担任をはじめとする当該校の先生方、当時も、そして、現在も心理臨床活動の支えとなっている事例 A 君との出会いに感謝し、ご健勝を祈念いたします。

文献

- Franz, Marie - Louise von (1970). Zahl und Zeit : Pzychologische Überlegunen zu einer Annäherung von Tiefenpsychology und Physik , Erinst Klett Verlag, Stuttgart.
Translated by Andrea Dykes(1974).Number and Time - Reflections leading toward a Unification of Depth Psychology and Physics : studies in Jungian Thought.
Northwestern university Press Evanston, pp.87-111.
- Jung,C.G.(1938). Psychology and Religion. Collected Works of C.G.Jung.
Vol11.Pantenon Books.村本詔司訳(1989).心理学と宗教.人文書院. pp.9-93, pp.94-182.
- 河合隼雄(1977). 昔話の深層. 福音館書店, pp.71-111.
- 河合隼雄(1988). 夢のなかのクライアント像(II).山中 康裕・齋藤久美子(編)臨床的知の探求

- (下).創元社,pp.3-20
- 河合隼雄(1991). イメージの心理学, 青土社, pp.126-132.
- 河合隼雄(1994). 心理療法の終結. 箱庭療法の理論と実際.河合隼雄著作集 3 心理療法.岩波書店, pp186-201,pp225-226
- 目幸黙僊(1984). ユング心理学と“一”の世界. 河合隼雄・樋口和彦・小川捷之編. ユング心理学—東と西の出会い. 新曜社, pp.1-38.
- 森谷寛之(1982).蟹・砂嵐・蛇・火事・血—てんかん児の遊戯治療.大原貢(編).てんかんの精神病理と精神療法.金剛出版, pp.226-243.
- 森谷寛之(2012). コラージュ療法実践の手引き—その起源からアセスメントまで. 金剛出版, pp.109-121.
- 中原睦美(2000). 外科領域での末期癌患者への心理療法的接近の試み-コラージュ・ボックス法を導入した2事例を中心に. 心理臨床学研究(18)5, 433-444
- 中原睦美(2011). 選択性緘黙2事例とのプレイフルなコラージュ・ボックス法の展開—三人で語り合う関係で発生したパーツ持参の意味を通して. コラージュ療法学研究, 2(1), 7-28.
- 中原睦美(2012). コラージュ制作体験により芸術的志向性が賦活された60代女性の事例—外科領域でのボックス法導入事例を通して. コラージュ療法学研究, 3(1), 3-14.
- 中村勝治(2004). 開業心理臨床におけるコラージュ療法. 高江州義英・入江茂編 芸術療法実践講座3 コラージュ療法・造形療法. 岩崎学術出版社,pp.59-75.
- 中村勝治(2011). 事例から学ぶコラージュ療法.日本コラージュ療法学会第2回大会基調講演.コラージュ療法学研究, 2(1), 39-49.
- Winnicott,D.W. (1971). Playing and reality. London : Tavistock Publication 橋本雅雄訳(1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, pp.53-90, pp91-1.
- 山中康裕(2002). 遊戯療法のコツ. 臨床心理学,2(3), 331-336.

The Jungian number symbolism as expressed in the Collage Box Method and its transformations.

Mutsumi. Nakahara (Kagoshima University)

Abstract:

This study focuses on a course of 25 interview sessions with a 9th grade male absentee student with whom I used the Collage Box Method while working as a school counselor. The student's refusal to attend school appeared to have stemmed from problems in ego and attachment formation. Epilepsy was also a factor. Creating collages at each session stimulated his creativity: he began expressing his conflicts, and held dialogues with his inner self, leading to ego re-formation and adaptation. He repeatedly expressed the symbol of “2,” as found in Jung's number symbolism, and showed qualitative changes that progressed from expressing conflict and tension to integrating them. Changes were also seen in the characteristics of his collage works, such as protruding unglued edges, the leaving of blank spaces, and gluing pieces in layers, as well as leaping in time-space. These coincided with improvements in the nature of the interviews and in his daily circumstances. From the perspective of protecting the interview relationship, the usefulness of the Collage Box Method in the school setting was thus confirmed.(175 語)

Key words : Jungian number symbolism, expression of the symbol “2,” Collage Box method